

「みんなの当たり前」は私の試練

中 一

物心が付いた頃なのでしようか。保育園に通っていた二歳から三歳になる時期に、私はいつの間にか、保育園にいる間は一切、声を出さなくなつたそうです。母がお迎えに来た際に、異変に気付きました。インターネットで調べたところ、どうやら私は「場面緘黙症」という症状に当てはまったそうです。

私自身はまだ幼かったし、もちろん友達も幼かったので大きな苦労はありませんでした。また、声を出せない症状について、母はすぐに保育やクラスでの保護者会等の場で説明し、周囲の方々に理解してもらい、たくさんのサポートをしてもらえたそうです。しかし、年齢が上がるに従い、「どうしてしゃべれないの」「声、聞いてみたい」など、友達が疑問に思うようになったそうです。それからというもの、母は私を連れて町の支援センターに通ったり、いろいろ相談にのってもらったりました。

月日がたち、様々な取り組みをしていくうちに、あることがきっかけとなり、私は子供同士なら話せるようになりましたが、大人や大勢の人の前では相変わらず声が出せませんでした。私自身も「声が出せないこと」に少しずつ不安を抱くようになっていきました。なぜなら、小学校に入学するとみんな当然のように名前を呼ばれたら、「はい！」と返事ができないといけないし、挨拶も大きな声で元気よくしましようにと教えられます。しかし、みんなが普通に当たり前にできる「声を出す」ということが私にはできない……。そんな思いを背負って何年も過ごしてきました。

一番困るのは、先生に何かを伝えなければならぬときや授業中の発表をするときです。そのため、母は入学時と進級ごとに、学校に説明に行きました。私の症状について先生がクラスメイトに説明してくださって、クラスメイトのみんなはサポートしてくれました。おかげで、私は小学校生活も大きな不自由なく乗り切ることができました。もちろん、時には「いつになったらしゃべるの」とか「自分で先生に言いなよ」と言われてしまったこともありました。そのたびに私は心の中で

「好きでしゃべらないようにしてるんじゃない！」と思い、いつか必ず自分の声で話せるようになりたいという思いが増していききました。

でも、このような私を本当にたくさんの方が手助けしてくれたことは間違いないのです。そのたびに私は問いかけます。「私は誰かを助けたことがあるだろうか」と。断然、助けたことより助けられたことの方が多いと思います。とっさに「大丈夫？」とか、そういった言葉がぱっと出ないのです。心の中では、みんなと同じように心配しているのですが、そんな自分を、時には「ダメな自分」と思ってしまうこともあります。でもあるとき、母が言った言葉に救われました。それは「あなたが場面緘黙症ばめんかんもくしやうで生まれて来てくれたからお母さんや家族のみんなは、今までなかなか知ることができなかった世界を少しずつ知ることができたんだよ。ありがとう。」と言われたことです。このとき、ああ、私が私でよかったんだと自分を認めることができました。

私は中学生になり、ぼんやりとはあるけれど、自分の夢もち始めました。なりたいたい自分に近づくためには、やはり「場面緘黙症ばめんかんもくしやう」を克服しなけ

ればと自分自身を奮い立たせて、とうとうみんなの前で発表することができました。私自身はもちろん、家族も、そして見守ってくれていた友達やそのお母さんたちも、自分のことのように喜んでくれました。それと同時に、私は改めて、「人の当たり前は自分の当たり前ではない」「私の当たり前は人の当たり前ではないのかもしれない」ということをもつともつと真剣に考え、相手を思いやれる人間になっていきたいと思いました。

私は今、以前の私より少しだけ自分に自信もてるようになりました。それは話せなかったことを克服しただけでなく、私自身のこの経験から一人一人の違いを認め合うことが大切だと気付けたからです。これからは、私も誰かの助けとなれるような存在になっていけたらと思います。